

「額縁」川柳徒然草

上野 一彦

川柳とは、世界で一番短い定型詩といわれる。兄貴分にあたる俳句同様「俳諧の連歌」を生みの親としている。

俳諧の連歌とは、最初の発句(五・七・五)に別の人が下の句(七・七)を付け、さらに別の人がそれに五・七・五の句を付けるといったことを繰り返し、三六句、あるいは一〇〇句までを一作品とする言葉遊びであり、俳句はこの発句が単独で作られるようになったものである。

連歌遊びには、先に七・七の下の句(前句)をお題として出し、それにマツチする五・七・五の句(付句)を考え出すという趣向もあり、その付句が独立したのが川柳と聞く。

人は齢を重ねると、さまざまな能力が明らかに衰えてくる。老人なら記憶力や協応運動力などは誰しもが実感することであり、若者がスマホなど器用に操るのをみて到底同じ人間とは思えぬこともある。

そうした年齢とともに衰えゆく能力のなかで、最後まで残るのは言葉の能力であり、寸鉄釘をさす老人の皮肉などは、長年の手練の賜物というわけである。ボケ防止に言葉遊びは何よりも大切で、俳句や川柳の世界に遊ぶことは最高の脳のリハビリである。

大学時代、同じ研究科で学び、四角いテーブルで積み木遊びなどを楽しんだ悪友たちは、卒業後それぞれの道を歩

〇〇歩、明日は我が身、大差はない。

悠久の大河の一滴わが命 (一彦) 題「川」
悲しみも大河の一滴やがて雲 (一彦) 題「涙」

川柳としての出来はともかく「大河の一滴」それが今の心境である。かれこれ五年近くも精進したというのに、もうちょっとまじな句で冒頭を飾りたかったが致し方ない。わが川柳同人の師匠格にして、ライバルでもある晃彦氏からは、五木寛之のパクリと一顧だにされなかった句である。

ものごとには上には上があるもので、その晃彦氏が、現代川柳子の一〇指にはいるだろうと折り紙を付ける達人が、大木俊秀氏と岡部達昭氏である。今や、われわれ共通の憧れの師でもある。

俊秀氏曰く、「ズバリ斬る ホロリ泣かせる チクリ刺す ニンマリ笑う ポンと膝打つ」これぞ川柳の極意。酒好きで女性にもてる氏ならではの句を披露する。

んだのだが交遊は続いた。その遊びのリーダー格であった岡部晃彦氏の声掛けで、川柳多年草という老後対策を意識した集団を結成したのも、互いに指先から脳へのエクササイズ転換の必要性を感じ始めたからであろう。その顛末については、文芸同人誌「琅」二四号(二〇一一年九月)に掲載したエッセイ「多年草酒造川柳品評会(平成二二年版)」に詳しい(http://homepage1.nifty.com/muneuchi/rou/rou_index.htm)。

中学・高校と親しかった友人が五〇歳半ばで突然若年性アルツハイマーを発症した。奥さんがその変調に気づき、なんとか定年まで持ちこたえ、以来、夫婦で病氣と付き合っている。病は確実に、そして手を緩めることなく彼を蝕んでいる。今は寝たきりの床で、嚥下困難で鎖骨下からの点滴で栄養を補給している。

生命維持装置を付けただけの姿などあの誇り高き彼は決して認めないだろう。その判断も自身ができない状態であることに、やがて家族の苦悩がやってくる日が目に見える。

しかし、お互い古希を迎える身なれば、早晚五〇歩一

肝臓にあつて一献ささげたい(大木俊秀)
わが妻のことでありしか令夫人(大木俊秀)

同じく、達昭氏によれば、川柳は「うがち かるみ おかしみ」から始まるが、その究極は人生のペーソスに寄り添ふことのようなのだ。秀句は枚挙に暇がないが、これらは特に好きな句である。

人文字の濁点にいる君と僕(岡部達昭)
涸れてから鋭さを増すばらの棘(岡部達昭)

まさにこれが川柳、ザ・川柳である。人生の深淵を覗く 思いの、凄みさえ感じる。いつの日かこの境地の裾野にでも達したい。たとえば点滴という言葉を使っても達人たちになるところなる。

点滴にワインボトルをつるされよ(大木俊秀)
点滴のようなあなたの愛し方(岡部達昭)

しかし、ドングリはドングリとして、多少はましなシ イノミ程度の句を指す矜持は持ち続けたい。先輩諸氏に

親逝つて俺も子どもでなくなった(一彦)
我儘を詫びさせぬまま親は逝く(一彦)

この歳になると、肉親との別れも決して少なくはない。親、特に息子にとって母親との別れは大きな節目である。男はマザコンであることを恥じることはない。それが「ク ラシカルで正当なマザコン少年」であるなら(この表現は、エッセイストの端くれである私の、偉大なる友人、市川卓 司氏の「そのときは彼によるしく」(小学館文庫)からの 引用である)。

我儘の句は、母が亡くなった後、数限りなく作った句 のひとつだが発表せぬままに手元に残った句である。

魂も鯉も一緒に千の風(一彦) 題「風」
薄き世に花の便りの義理がたさ(一彦)

俳優など著名人の逝去のNEWSに添えられた年齢に、 自分の歳を足し引きし、命のろうそくの残りを体感するこ とも多くなる。それどころか親しい同輩の訃報に、三途の 川を渡りかけている自分の姿さえ思い浮かぶ。こんな時、

は遠く及ばないが、ドングリ仲間からシイノミ級の評価を 受けたものをいくつか・

礼儀知る孔子孟子はどこの人(一彦)

日本人にとって礼節の鏡であつたかの国の中華思想は 今や地に堕ちた。自国利益のためなら国際法もなんのその、 報道管制も珍しくない。新幹線の重大事故があり、検証も済 まぬうちに事故車両を埋めるといふ暴挙。世界の批判を浴 びると今度は掘り起す。この機をみて敏、かつ不可解な現 代兵馬備についての一句。

始皇帝もあつと驚く埋め戻し(一彦)

時事川柳はタイミングと周知度がポイントとなるのが だが、所詮、NEWSの命は短く、ましてや床の間の「額 縁」には入りにくい。上句は五文字を超えることもままあ るようだが、できるだけ律儀に定型を守るのが、言葉の推 敲という意味でも初心者のあるべき姿と心得る。なんだか 一世を風靡したハナ肇のCM「タメゴロウ」もどきで申し 訳ない。

川柳界の与謝野晶子と呼ばれる時実新子氏の鮮烈な句が 脳裏をよぎる。

れんげ菜の花この世の旅もあと少し(時実新子)

素晴らしい先達たちの名句に下手な自句を織り交ぜるな ど、まさに暴挙中の暴挙であることは重々承知の上である。 その落差から川柳の奥深さが伝わるなら本望であり、お耳 のけがれへの配慮とお許しいただきたい。

雪化粧街のけがれを頬かぶる(一彦) 題「雪」
夜が明けて蝶に替わつて鴉舞う(一彦)
鯉のぼり汚れた大気ひと飲み(一彦)

正直、無粋を絵にかいたような人生を送ってきたのに、 自然が目にも留まるようになるのも歳のなせる業か。ここ数 年、友人との野山や庭園をめぐる散策など、まさにゴール デン・タイムである。人生の終焉は景色がきれいに見える とか。ゲーテの今際の一言「もつと光を！」もそうだと聞 いたことがある。

されど凡人なればこそその幸せもあると実感するのは、家庭であり、家族との日常であろう。若いころから写真に興味にしていた友人の「究極はファミリイだよ」とのつぶやきが妙に耳に残る。

サラリーマン川柳やシルバー川柳の題材には事欠かない。恐妻家や出来の悪い子どもへのいらだちも、実は深い家族愛の裏返しだと思ふ。

カミさんの無口になぜか動揺し（一彦）

心こめ妻に触れると静電気（一彦）

このケーキ罪滅ぼしなら甘過ぎる（一彦）

カミさんシリーズの三連発。男とは性のないもので、言い過ぎたり、やり過ぎたり、でも反省力だけはあるつもりなのだが。ただその書いては消す、消しゴムのような生き方が時たま連れ合いの逆鱗に触れる。

妻と子が実行支配チャンネル権（一彦）

平和です軍手手足庭仕事（一彦）

極楽は身近にありしおらが風呂（一彦）

一般公募による「サラリーマン川柳」からブームとなった現代川柳は、幅広い愛好者層を広げ、川柳の歴史から見ても見事な一ページ、いや一章をなしている。性懲りもなく続ける。

住所録医者と坊主に二重線（一彦） 題「医者」
ルンバON猫と夫が後を追う（一彦）

この句、多年草内では散々だったが、自分としては納得の句である。ONを思いついた時、まさに御の字。絨毯など毛足の長い敷物の上を走るルンバをイメージし、跡にしたが、言葉遣いとしては後がよいかと手を入れた。

ためらわずゴキブリを討つ細い腕（一彦）

俊秀さんの令夫人で結ぶ句が想い浮ぶが、女性の隠れた強さと細い腕の対比をおかしみとして読んだ。夫婦ものは当然だが、子どもや子育ても題材の宝庫である。

カラフルにひとり歩きのランドセル（一彦）

それにしてもあがけばあがくほどサラ川の泥沼を這いずり回る。しかし、サラ川、サラ川と馬鹿にしてはいけない。ご存じサラリーマン川柳の名作、何度読んでも深く頷く。

まだ寝てる帰ってみればもう寝てる

（第五回サラ川第1位作品 遠くの我家）

ドットコムどこが混むのと 聞く上司

（第一四回サラ川第1位作品 ネット不安）

この俺にあたたかいは便座だけ

（第二〇回サラ川第2位作品 宝夢卵）

たとえサラ川風であつても。俊秀氏や達昭氏になると深さがちがう。

部外秘となまじ書くから外に漏れ（大木俊秀）

終点のひとつ手前で席が空き（大木俊秀）

井の中の蛙に会いに定期券（岡部達昭）
奔放な夢は鑄型の中でみる（岡部達昭）

晴れの式いそぐ母子の勝負服（一彦） 題「飾り」

入学式に卒業式、そういえばそんな日々もあつたなと思出す。

七光りわが子に欲しいひと光（一彦）

政治家もタレントも世襲ばやり、何も残せぬ身なればこそその控えめな親の願いである。

川の字も子ども育てば小となる（一彦） 題「川」

大きく育った息子の両脇を父母が連れ添う光景。漢字を題材とした考え落ちみたいな句といふべきか。

就活もかつたるとご令息（一彦）

あんなに大切に育てた息子が家でゴロゴロ。よくある風景である。溜息つきつつも夫婦の絆を一層強めたりして。実感した題材でないけども作句はうまくいかない。頭で作るな、心で作れ、ということ、この歳になればシルバ

「川柳が多くなったとしてもそれは至極当然のことかもしれない。

目覚ましが今朝も鳴るのをじっと待つ (一彦)
お互いに乗り換えもせず終着に (一彦) 題「駅」

なんとなく空巢になった高齢家庭の日常がにじみ出る。

道楽の三步手前がよいご趣味 (一彦) 題「楽しむ」
太陽の季節夢見る老い力 (一彦)
古希迎え恋の修羅場で踊る夢 (一彦)

どうなっているのだろうかと思うほどの元気な老人もいるが、歳というものは相応にとつていくものである。古希とは「心の欲する所に従へども、矩を踰えず」である。

洒落は洒落でも、言葉遊びはしやれている。ペリー来航の大混乱を歌った狂歌「蒸気船(上喜撰)、たった四杯で夜も眠れず」、黒船と茶の銘柄を掛けた狂歌であるが、こうした掛詞は川柳でも使われる。ただのダジャレは品位をさげるといわれ続けても、こちとら若いころからダジャレ好き。どうしてもその癖抜けきらず響響を買うことにな

税と弱き市民の息上がる (一彦)
カネカネとヒグラシまでが鳴き叫ぶ (一彦)
昔おろし粟と風吹きすさぶ (一彦)

とはいいながら、いくつになっても男だつて女だつて色気は失つてほしくない。俊秀氏ほどになると仙人のごときエロテイジズムがある。結局それが本物のアンチ・エージングかもしれない。

わたくしのおいしさ洩らしたら殺す(大木俊秀)
後ろ手で鍵を下したのは女(大木俊秀)

すごい一言。この一句で短編小説が書けそうである。とても家族の前で状況を説明する勇氣はもてない。そこへいくとわれらの句はかわいいものである。

惚れちゃったあら惚けたのかわされる (一彦)
正直に生きた結果よわかってね (一彦) 題「わがまま」
虫干しをしたほうがよい君とぼく (一彦)

虫干しの句の結びは、憧れの達昭さんの影響がにじむ。春夏秋冬、男女の長い歴史には梅雨のような倦怠期もあり、だからこそ合間の日差しが二人にとつても大事な時間と読んだ。その意が伝わらないとすれば、句そのものがまだまだ未熟というわけ。だいたい説明をしなければわからない句は完成度が低いのである。

スマホだのiPADだの、情報コミュニケーション技術だつて使いこなせずとも名称くらいは知っておきたい。雅な古語をやたら使いたがるのも困るが、商品名や造語はもつてのほか、略字、略語も時と場合である。さきの掃除機ルンバなどギリギリ。特に女子高生の使う言葉はチョベリバ(今は死語だが、超ベリー・バッド)。流行語など新語に敏感であることも、世間とのつながりを大切にすると

いう意味で、若さを保つ秘訣ではある。ただ、こうした題材の句は多年草では評価されないことが多いし、選外句となることもしばしばである。せめて次の句くらいはわかってほしい。

名月やこれぞ夜空のLED (一彦)
初詣神のメモリー焼き切れる (一彦)

ところで、兄弟子たる見彦氏が謔言の様にわれらに囁くのは、狭い句想でパターン化しがちなサラリーマン川柳や今日流行のシルバー川柳を超えた、人生の機微を自在に切り取った、「額縁」に入れて飾っておいても恥ぢずかしくない句作りである。その気合いやよし。

川柳という俳句との差異を論じられる方も多いが、どこのつまりその差はかなりあいまいである。季語のない俳句かと思えば、ひとそのものを読むのが川柳とか。口語が主体で身近な存在であることにはちがいない。俳句一〇〇選等の本を手にとると川柳といつても通用する句も意外と多い。

川柳側から言えば、季語の縛りもなく、生きとし生ける生のひとの姿、森羅万象ありとあらゆる事どもを、自由に五七五、いや一七文字で表現するのが川柳であるということになる。時には句またぎという、定型の句の切れ目と無関係に意味がつかえることも許されるが、そうした句形をも壊し、単に一七文字だけを守った句もある。上級なればこそその立派な手法である。この自由さ、だから川柳は限りなく面白い。

何してるんですす麦踏んでるんです（大木俊秀）
貧乏してたね西日強かったね（大木俊秀）

何か映画のシーンを切り取ったかのような味わいがある。秀でた句というのはそこからいくらでもイメージが広がっていくものらしい。五七五と指を必至に折っている自分が小さく見える。達昭氏の次の句は、内容も実に深い形も真似できない。

つまらない男に褒められた失意（岡部達昭）

もつとも、先に紹介した時実新子氏ともなると、そのスケールはでたらめといつてよいほど大きく、到底、われらが真似などできぬ自由奔放さである。川柳の女ピカソとでもいうべきか。

何だ何だと大きな月が昇りくる（時実新子）

私私私ドア蹴るなだれこむ（時実新子）

女の情念というか、その句には怒涛の勢いがある。私自身も相応にわがままに生きてはきたが、所詮、井の中、鏝

型の中でのこと。せめて川柳ならばこそ、その自由さを味わってみたい。これが歯ざしりですっかり歯の抜けおちたゴマメの果てしなき夢である。

愛しすぎた私きつと死ぬでしょう（一彦） 題「嘘」

定型を離れた初めての句である。案の定、仲間内からの評価は低かったが、チャレンジした自分をほめたい。誰かわかってくれないかなと密かに思っていたら、さすが晃彦氏、この川柳自体がオーバーな嘘という仕掛けが面白い、と句形を超えたおかしみを理解し、選句してくれた。

後に、晃彦氏が仕事の先輩でもある達昭氏に、多年草の最近の成果をお見せしたところ、この句について「だいぶじょうずになりましたね」とのお褒めの言葉をいただいたことを伝えてくれた。他の誰あらぬ達昭氏からである。「やったー」その夜の酒は殊の外、美味かった。

こうしてわが川柳の旅路は、大学時代の同窓という、似たような出自の六人のオジサン集団の定年後の楽しみで始まった。しかし多年草（一年草でははかないし、宿根草ではしつこすぎる）という絶妙の命名がよかったのか、実に

楽しく充実した時間を提供し続けてくれた。

誰が先に逝くというわけでもないが、三年も続くとこの先どうなるかと余計なことが頭をよぎる。おまけに誰の句かおおよその想像もつくようになり、いささか興味がそがれる雰囲気もでてきた。自分としては二番手、三番手の句が、好評なときは、こそばゆい気持ちはあるけれども素直に喜んでしまうが、逆に、これぞ「額縁」と渾身の一句が期待はずれの評価で終わったときなど、ここでは評価されなくても世の中ではもつと圧倒的な支持を受けるはずと、うそぶいたりすることもないわけではなかった。

そこで四年目になって、周囲に働きかけ、多年草の株の輪を広げてみるようになった。長年バレーボールチームの六人であったものが、たった一年の間に野球の九人、サッカーの一人、ついにはラグビーチームの一人五人へと大変身を遂げた。所得倍増ならぬ二・五倍増である。

結果、放送関係者四人、雑誌編集関係者三名、大学人（心理学関係者）六名、その他二名という大所帯となった。全体としてみれば、言葉と心に強い面々の勢揃いである。まさに多年草疾風怒涛の時代が到来した。

多年草の歴史にとって、初の女性参加は大きな波紋を呼んだ。新加入の五人の女性陣、豊かな日常性と鋭い感性で

あつという間に月例の評価で上位を独占、多年草を完全に制圧してしまった。しまったはあとの祭り、後悔先に立たず。噛ませ犬ならぬ引つ掻き猫として君臨。女性上位の世の習い、下剋上というか、予想もしない事態が引き起こりつつある。何とかせねばとあせりつつも、まだ具体的な反撃に打ってでる、その糸口さえつかめない。

あの穏やかなオジサンだけの平和な日々が無性に懐かしさ、ユーミンの「あの日に帰りたい」のメロディーを口ずさむ今日この頃である。

負け惜しみナンバーワンよりオンリーワン（一彦）

【引用文献】

大木俊秀（二〇一〇）大木俊秀 川柳作家全集 新葉館出版

堤丁玄昉（二〇一二）スピードマスター川柳の教科書

新葉館出版

多田哲郎・多田佳子（二〇一三）えっせい こころの

川柳 文芸社

（二〇一三年七月一日）

